著者 市野澤 潤平
タイトル 被災した楽園: 2004 年インド洋津波とプーケットの観光人類学
出版社 ナカニシヤ出版
出版年月日 2023 年 3 月 31 日

本書は 2004 年 12 月に発生したスマトラ沖地震が生み出したインド洋津波の被災地である国際的観光地プーケットをフィールドに、災害発生直後から約 10 年にわたって行われた参与的調査によって描き出される、とくに現地の日本人在住者やボランティアを含む観光にかかわる人々を対象とした観光人類学の民族誌的研究の成果である。

「観光＋災害」という問題関心を足場とした、「楽園」から「被災地」へ、そして「被災地」から再び「楽園」へと移り変わるプーケットの定点観測ともいえる本書であるが、そこで報告され、議論されるテーマは多岐に渡る。

災害による一次的な被害が詳述されることはもちろん、風評被害を含め、外から向けられるまなざしとの葛藤の中で「楽園」と「被災地」のはざまを移ろう地域の対他的アイデンティティの遷移、地域が被災の事実を観光資源化するダークツーリズムの動き、そして被災の痕跡を抹消し、再び発展軌道に乗った観光地でこれまで以上に加速する自然破壊やオーバーツーリズムなど、被災から復興に向けた時間軸のそれぞれの段階において地域社会が直面するさまざまな問題が考察の俎上に載せられるが、なかでも本書の中核ともいえるのが、第 3 章から第 5 章にかけて展開される、多くが観光に従事する現地在住日本人たちの置かれた社会状況、そこで彼らが経験したこと、そして彼らの行動と決断についての分析である。そこで彼らは「日本国籍を持ちながらプーケットに在住している観光関連事業者（または従事者）という立場ゆえに、プーケットの内外から津波被災者たちへと向けられた支援のまなざしから疎外された存在」であり、「在住国／出身国／国際機関のいずれによるセーフティネットからもこぼれ落ちた存在」として「見捨て」られた存在であったことが描出される。著者は、本研究は一義的に防災・減災を志向するものではないと述べているが、災害被害の定義とその支援をめぐる既存の枠組みから取りこぼされるものの指摘とその構造の分析は、いうまでもなく今後の防災や災害支援の在り方に非常に有益な問いを投げかけるものである。

このように 10 年にわたって特定の地域を追い続ける調査と、災害と観光にまつわる諸要因と議論を複合的に取り扱うことで、大規模災害に襲われた被災者および観光地の地域社会が経験する長期的かつ多面的な過程を緻密に描き出すことに成功していることは本書の大きな価値といえる。

いずれにせよ、本書においては全世界の観光従事者と観光地の地域社会を巻き込んだコロナ禍を経験したわれわれが喫緊の課題として直面する諸問題とその顛末が記録、分析されており、観光人類学のみならず、より広い領域の研究において、この「観光＋災害」という問題系に取り組む研究者がまず手に取るべき一冊として参照されることになると考えられ

る。したがって、本書は本学会の著作賞に該当すると評価できる。

記

はじめに
第 1 章　〈楽園〉の危機――観光地プーケットと津波災害
第 2 章　風評災害――観光忌避の社会心理
第 3 章　危険からリスクへ――在住日本人における風評災害の経験 1
第 4 章　プーケット復興委員会の熱い夏――在住日本人における風評災害の経験 2
第 5 章　楽しみとしての〈自然〉保護――ダイバーたちによるサンゴ修復ボランティア
第 6 章　楽しみのダークネス――タイと日本の災害記念施設の比較考察から
第 7 章　津波を忘却した〈楽園〉――観光地プーケットにおける原形復旧の 10 年
第 8 章　〈楽園〉の現在――18 年後のエピローグ
おわりに

以上